

GANEFO の 思い出

桑原 和司 (76 歳)

(成城大学出身)

思えば東京オリンピックを翌年に控えた1963年(昭38)に開催されたガネフォに参加した事は、自分のその後の人生の方向を大きく変える転機となった。インドネシアで多くの現地人と英語で交流し、その有用性を痛感したからである。選手村に出入りする若い娘達の英会話能力が高く、楽しい雰囲気の中で、意見や感想、情報を交換できた。米英支店勤務を志す銀行員としては、英語とその会話力を格段に高める必要がある事を痛感し、帰国後、勉強を開始した。

先ず、NHK 教育テレビの英会話中級会話のテキスト・ブックを購読し、毎晩の30分番組を視聴して発音と聴取りに注力した。力を蓄えた後、四谷に有る日米会話学院へ6カ月派遣される行内試験にパスし、卒業した。1969年にニューヨークの米銀へ6カ月、1974年にメリルリンチ本社へも6か月間研修に行き、国際要員の資格を得た。のち、ロスアンゼルス支店に4年、シアトル支店に4年派遣され、充実の在米生活を送った。愚息らも銀行を選び、欧米国際機関や支店を回りハッピーに暮らしている。正に1963年のジャカルタ行が行内業務の方向づけとなり、その余沢を受けている。そのキッカケとなった GANEFO からの招待に強い感謝の念と、大きな幸運であったとの感懐を持っている。

1960年に銀行に就職し、9月に催される東京銀行団の水泳大会・百米自由形で毎年優勝し、平穏な水泳生活に浸っていた時、11月にジャカルタで開催される THE GAMES OF NEW EMERGING FORCES に出場しないか、という誘いの報が齎らされた。当時は日本の外貨準備は少なく、海外旅行は許可制であった。小学生の頃から海外渡航の憧れは強く、なんとしても勤務先の許しを得て夢を実現したいと思った。コーディネイターの頭山立国氏によれば、在日インドネシア大使の名で、銀行頭取宛に招請状が出されるとの事であったので、それに期待した。受取った頭取は人事部にそれを回した。人事部は、目をつぶってやるから参加しても良いが、1か月も休暇を取る事が、翌年の主任昇格に不利となる影響も考慮の要ありとの判断であった。『主任昇格が1年遅れてもいゝや』と開き直って私用休暇を取ったが、結果は翌春、昇格を見た。

11月1日には浜松町の旅館に水球の12人が泊り、翌2日朝、羽田から GARUDA(インドネシアの国鳥)航空の4発プロペラ機でジャカルタに向った。機内アナウスの「トゥアン トゥアン、ノナノナ ニョニャ ニョニャ」を聴いて

異国の雰囲気を感じた。三原山、鹿児島島の桜島、開闢岳を眼下に見て、飛行3時間半で香港に着いた。数人が免税店で OMEGA や RADO 等、大枚の米ドルを叩いて購入した。

このあと3時間のフライトで暑いマニラに給油着陸、英語の巧みなフィリピンガールと話をし、アメリカとの関係を思い起した。

3度目のフライト二時間余で、旧オランダ領東インド諸島時代、バタヴィアと呼ばれていた現 DJAKARTA・クマヨラン空港に着陸、愛国的ジャワ男の大音声による『Hidup GANEFO! Hidup GANEFO! (ガネフォ万歳!)』の高揚・激励の辞を受け、冷静な自分の感覚との乖離を感じた。ロビーで若い娘達から英語による歓迎を受け、国を挙げての大会である事を実感した。大会期間中、選手村やパサバル商店街でサインを求めて回りに寄ってきた二十前のチャーミングなレディー達、エフィー、ロジータ、ゾライダ、ギンチェ、イスティ、リーザ等とは親しく交流し、南十字星の下で記憶に残る会話を交した。彼女達は、今頃は孫と遊んでいるのだろうか。皆、古稀に近い年齢である。幸せな老境を祈っておこう。

我日本選手団の団長は、元陸軍中野学校（軍事諜報員養成校）卒で蘭印（インドネシアの日本語旧国名）からオランダを駆逐した解放者・柳川のオッチャンで、彼の国に於ける我々の対処の仕方を教示してくれた。他に柔道の現地指導者・高田氏から国情や街、その他助言や注意を聞いた。

到着2日目からは、専用バスで市内の練習プール・チキニプール（25米）に行き生ヌルイ水の中で毎日2時間練習をした。水泳競技開始時には、巨大な国立競技場に隣接するスナヤンプルで試合に臨んだ。11月17日、インドネシアと争い、先方のエース・オランダ系のフォワードにシュートを決められ2対0で惜敗した。インドネシアは第1, 3ピリオドに1点ずつ得点。日本はゼロであった。彼等の水中での余りにも汚く、ヒドいプレイに、ハーフタイムの時、菅久がレフェリーにインドネシアの水中プレイを観客注視の中で実演し、苦情申立をしたが受入れられなかった。

当夜、アルジェリアとアルゼンチンが対戦し、4-3でアルジェリアの勝となったが、終了直後に、アルゼンチンがノーマークドリブルシュートを決めた。笛を聞かなかった主審は得点を認めたが、すぐ取り消した。しかし、これが不満でアルゼンチンは以後棄権し最下位となった。翌18日、アルジェリアと対戦し、10対3で快勝した。ピリオドごとの得失点は3-0、4-2、2-0、1-1

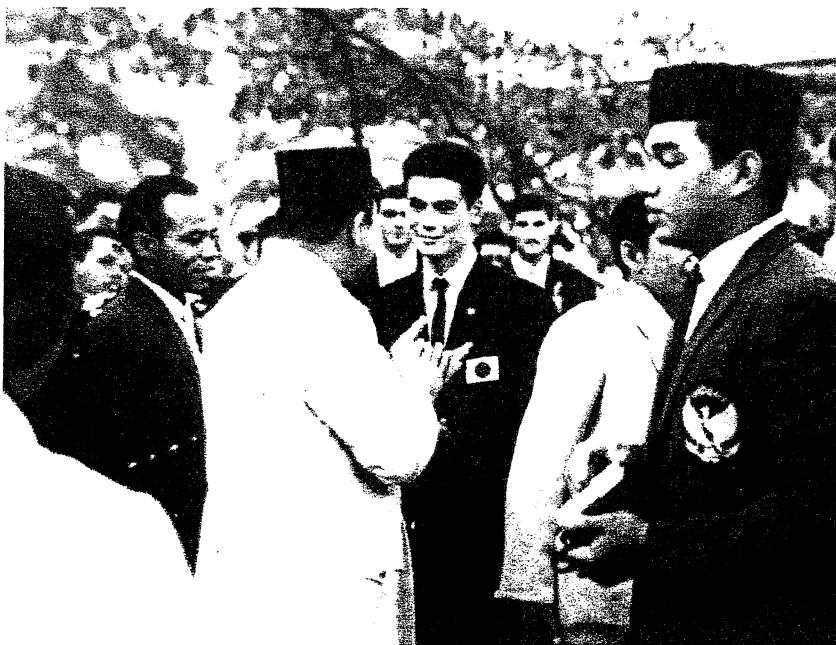
であり、我々全員が満足した。

大会後、キーパー房野は GIRL FRIEND 一家から媚入りを期待されたように、夜になると選手村を出て先方ファミリー宅の晚餐に招かれていたようだし、内田と本郷は、金も元気も充分にあったので、毎晩のように用心棒として兵隊二人を雇い、街の探訪に出かけ、彼らから『ウチダ 元気！ ホンゴウ 元気！』と敬意を表され、称讃・羨望を受けていた。

法政の中山は、口髭を蓄え、国際審判員（自称）として、アルジェリアーアルゼンチン戦で笛を吹き、アルゼンチンが放ったシュートの有効性に就いて紛糾した審判会議に於いて、確信を持って『No goal』の判定を宣し、会議を収束させた。

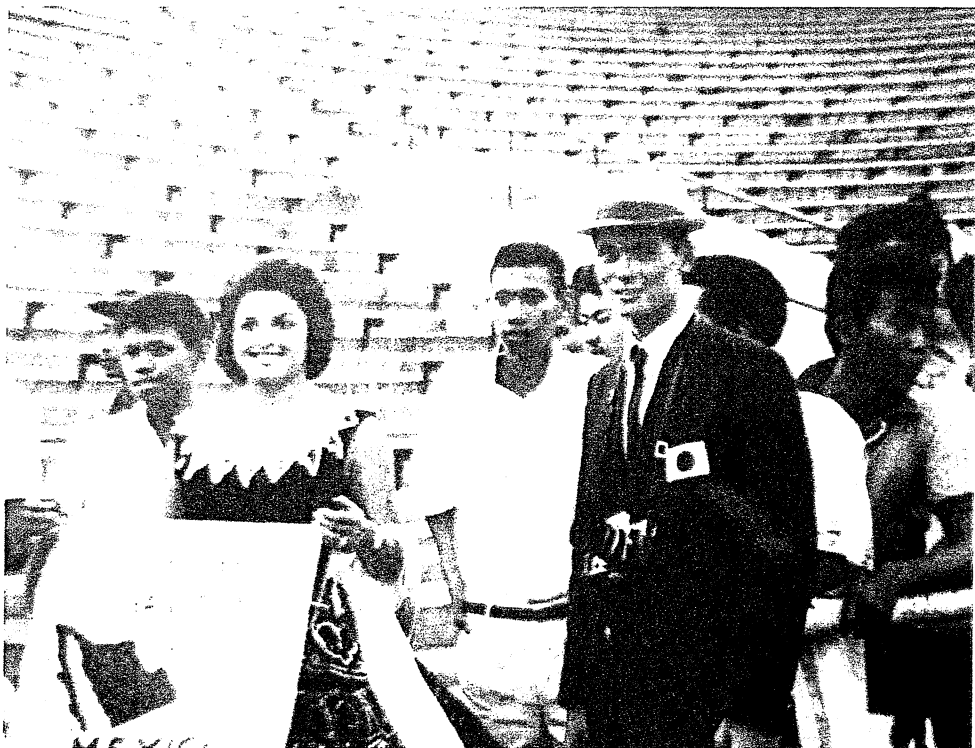
当地日付 11 月 23 日（アメリカでは 22 日）ケネディ大統領がテキサス州ダラス市行進中に銃撃・暗殺されたとの報を聞いた。大変衝撃的なニュースで、市民も暗澹たる気持で弔意を示した。選手村も市内の官公署も至る所で半旗を掲げた。

この夜、ボゴール宮殿でスカルノ大統領主催の園遊会が催された。大統領は上機嫌でダンスをしたり、日本語で「愛国の花」を口ずさんだりしながら、各国選手と会話を始めたので、自分も傍に行き、大会の成功を祝い、招かれたことの謝辞を述べた。日本との友好を深めて行くとのコメントを聞き意を強くした。



園遊会にてスカルノと話す私（桑原）

大会後の観光では、11月24日バスで東部に向い、プンチャク峠を越え、高原の古都、バンドンに行き、有名な国際会議場を見た事も強く記憶に残っている。滞在中、彼地で受けた温い歓迎、多くの人との楽しく心温まる交流、珍しい風物、異国情緒等に離れ難さを覚えつゝ、クマヨラン空港を飛立ち香港に向い、2日間の休暇を味わった。ホテルは、AUGUST MOON HOTEL という9階建てで乗降の都度、小銭チップを渡すのが煩瑣であった事を覚えている。香港発の時、初めて4発ジェット旅客機コンペアー990に搭乗。『4年後のエジプト大会にも参加したい。水連への復帰運動も始めよう』。という決意を記したコメントを主将菅久に渡し、2時間40分のフライトの後、無事羽田に着き、やるべき事を果たした後の充実感を味わいつゝタラップを降りたのである。



メキシコ楽団の金髪女性 右側が私（桑原）